

生物・生態サイトカード

通しNo.		B-8		更新日	2025/3/19
サイト名		よめ しま まつ 嫁ヶ島と松			
基本情報	区分	☐ 動物 ☒ 植物			
	生息地	島根県松江市袖師町(嫁ヶ島)			
	分類	嫁ヶ島(蚊島):国登録記念物(名勝地関係)			
	管理団体／保護団体／モニタリング				
	留意点				
サイトの解説	生物・生態	嫁ヶ島は宍道湖に浮かぶ唯一の島で、松江市街地の南西部、袖師町の沖約200mにあり、約1200万年前に噴出した玄武岩からなる小島である。現在の嫁ヶ島は、長さ約110m、幅約30m、周囲約240mの楕円形を呈している。嫁ヶ島が楕円形の姿になったのは、1981(昭和56)年～1982(昭和57)年に行われた護岸工事によると考えられ、島の周囲には消波ブロックとして松江藩の名工小林如泥が考案したとされる円柱形の来待石でできた如泥(によでい)石が並べられている。また、護岸の石材には大根島産の島石(玄武岩)が用いられ周囲が固められている。 宍道湖は夕日スポットとしてよく知られており、中でも嫁ヶ島の松を背景に沈む夕日は素晴らしく、「日本夕日100選」にも登録されている。また、2021(令和3)年に国の登録記念物にも指定された。 現在、嫁ヶ島には大小合わせて26本の松が生育しており、すべてクロマツである。江戸時代作と考えられる白潟天満宮祭礼図には、マツと思われる樹木が確認でき、古くからマツが生育していた可能性がある。昭和初期には数本のクロマツしか生えていなかったが、1935(昭和10)年に松江出身の若槻礼次郎が20本の松を植樹したことがよく知られている。クロマツは島根町多古の海岸から移植したもので、当時の写真から判断すると15～20年生の結構大きなクロマツが移植されたようである。その後は、若槻の意を受け継いだ料亭魚一が苗木を購入して植えたり、補植などが行われ現在に至っている。しかし、嫁ヶ島の地下水位は宍道湖とほぼ同じでクロマツが生育できる土壌層が限られていることや、波浪により根元が洗われることなどから、今後のクロマツの保全が大きな課題となっている。			
	地形・地質、歴史・文化等	嫁ヶ島は、約1100万年前の松江層堆積期に噴出した玄武岩よりなるが、対岸の袖師町で見られるような土壌を形成しやすい砂岩層の露出はみられない。			
写真・図等		 嫁ヶ島に生育しているクロマツ  嫁ヶ島のクロマツ  護岸に設置された如泥石と護岸			
参考文献		佐藤仁志(2015) 松江市史 通史編1自然環境・原始・古代(松江市史編集委員会): 146-147. 松江市.			